



# 石舞台古墳

## ～巨大古墳築造の謎～

### 解説書

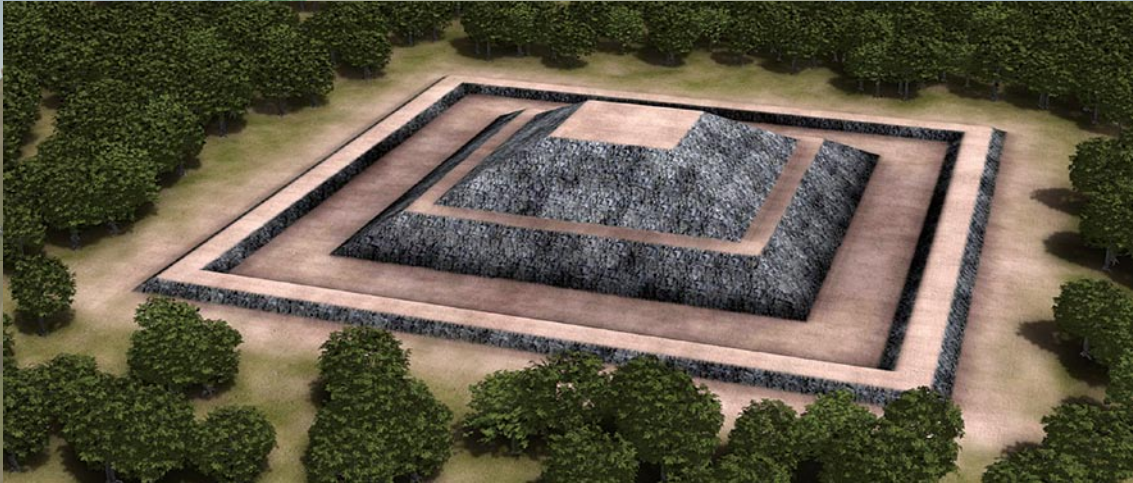


すでにいくつかの小規模な古墳が存在していたことが

約77トンもあると推定されています。

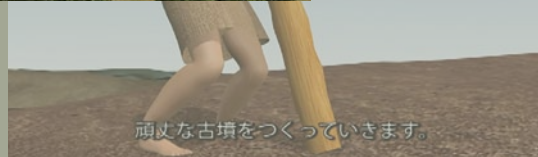


オウゴという棒で



リフトも  
土が失われてしまい、

この木製の道具は、エブリと呼ばれています。



頑丈な古墳をつくっていきます。



奈良文化財研究所蔵

奈良県明日香村  
関西大学文学部考古学研究室

これは、当時の墨書を書いた写本です。



貼石には見えた目を整える効果もあります。



平成24(2012)年1月



石室の内部から、土を運び出します。

わたしたちの明日香村は、豊かな自然が織りなす景観が「日本人の心のふるさと」として親しまれています。このような景観の中には、古墳や寺院、宮殿跡、石造物などの多くの遺跡が残っております。明日香の貴重な遺跡や景観の重要性を改めて認識し、多くの人々に見ていただけるよう、保存整備事業や環境整備事業に努めています。

その保存活動の一環として、明日香村と関西大学は、平成18年2月、相互交流をより一層促進するため、地域連携に関する協定書を交わし、その連携活動のひとつとして、平成21年、22年の2カ年において、古代遺跡再現事業（石舞台古墳～巨大古墳築造の謎～）としてDVDを制作いたしました。

このDVDは、関西大学文学部 米田文孝教授の監修のもと、古代における石舞台古墳の築造の様子をコンピューターグラフィックスでわかりやすく表現しつつ、併せてDVDに付属の解説書を活用していただくことで、理解を一層深めていただけると思っています。

世界遺産登録を目指す明日香村として、今日まで守ってきた文化財やすばらしい景観を、広く発信していくとともに、訪れる人が古代飛鳥をイメージ、体感していただけることを願っています。

明日香村内の小学校、中学校の総合学習のみならず、遠足や修学旅行で明日香村を訪れる児童・生徒の事前学習用の資料として、幅広くご活用いただければ幸いです。

最後になりましたが、このDVD及び解説書の制作につきまして、ご指導、ご協力を賜りました先生方をはじめ、多くの関係機関に対しまして厚くお礼申し上げます。

平成24年1月

明日香村長 森川 裕一

## 目次

シーン一覧	2
シーン①石舞台古墳	4
シーン②石舞台古墳下層の小規模古墳	5
シーン③～⑥古代における木製の道具	6
シーン⑦はつり シーン⑧修羅	7
シーン⑨盛土 シーン⑩搗棒	9
シーン⑪貼石	10
シーン⑫棺	11
古墳に関する基礎的知識	14
蘇我四代時代	21
関連本の紹介	26
図版出典・DVDレーベル出典・参考文献	28

## 例言

- i、本書は「石舞台古墳～巨大古墳築造の謎～」の解説書として作成した。
- ii、「石舞台古墳～巨大古墳築造の謎～・解説書」の制作、及び資料の収集に際して協力を賜った個人・機関は以下のとおりである。(順不同)
- 東京大学池内研究室、藤田尚・福井里香・木治準宝・上田裕敏・米田文代・西光慎治(以上明日香村)、池内克史・大石岳史・橋本真亜子・花房孟胤(以上東京大学)、角田哲也(アスカラボ)、米田文孝(関西大学)、早川和子、大阪府教育委員会、大阪府立近つ飛鳥博物館、橿原市教育委員会、柏原市教育委員会、春日市教育委員会、河南町教育委員会、京都大学考古学研究室、宮内庁書陵部、中能登町教育委員会、奈良県立橿原考古学研究所、奈良文化財研究所、福島県立博物館
- iii、本CGムービー中に用いたイラストは、早川和子氏の作成した原画を使用した。
- iv、本書は米田文孝・西光慎治による指導のもと田村唯史・辰巳俊輔・村瀬陸(関西大学)が執筆した。

### 《経歴》

アニメーター時代に「天才バカボン」「ギャートルズ」「ガンバの大冒険」の動画を担当する。整理員を経て1989年頃から考古学復元イラストを描くようになる。『日本歴史館』・『よみがえる日本の古代』(小学館)『日本史復元』(講談社)『発掘された日本列島』(2004～2007)(朝日新聞社)奈良文化財研究所が開催した「平城京展」「長屋王展」「飛鳥・藤原京展」などの図録、馬高縄文館、いましろ大王の杜ほか遺跡案内パネルの復元画を多数作成している。



早川和子

# シーン一覧

シーン①



シーン④



この木製の道具は、エブリと呼ばれています。

シーン②



すでにいくつかの小規模な古墳が存在していたことが

シーン⑤



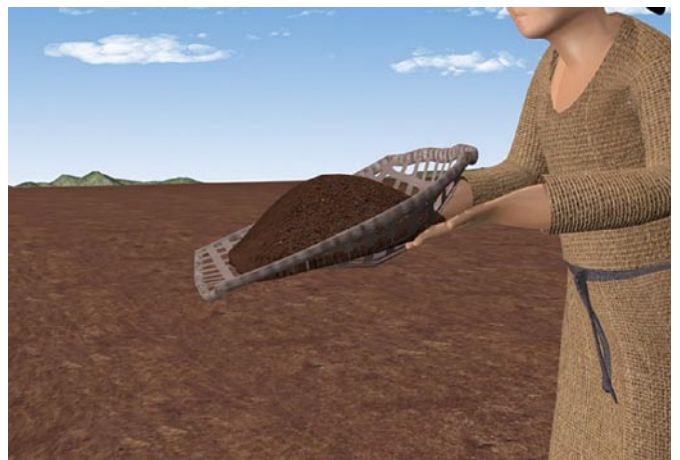
これは、当時の<sup>ツムギ</sup>織車を復元した写真です。

シーン③



オウゴという棒で担いで運んでいきます。

シーン⑥



シーン⑦



シーン⑩



シーン⑧



シーン⑪



シーン⑨



シーン⑫



約77トンもあると推定されています。

頑丈な古墳をつくっていきます。

現在の石舞台古墳は、この盛土モリツチが失われてしまい、

石室の内部から、土を運び出します。

## シーン① 石舞台古墳

### 《石舞台古墳の概要》

石舞台古墳は、奈良県高市郡明日香村大字島庄に所在しています。この古墳が造られた時代は古墳時代後期から終末期であると考えられています。墳丘上段の盛り土が失われているために本来はどのような形をしているか確認できませんが、発掘調査によって下段は方形を呈していることが明らかとなっています。今日、考古学者の中では、上下段とも方形の方墳であるという考え方と、上段が円形の上円下方墳であるという考え方があります。当CGムービーでは上段が方形であるという説にしたがっています。残存している墳丘の下段部分は、一辺約 50m で、幅 5.9～8.4 m の空濠があり、その外側には上面幅 7 m の堤が確認されています。

石室は、玄室と羨道からなる両袖式の横穴式石室です。玄室は、長さ 7.7m、幅 3.5m、高さ 4.7m、石室の全長は 19.4m です。石英閃緑岩（通称飛鳥石）と呼ばれる石舞台古墳付近で産出される巨石を積み上げてできた石室で、特に 2 石ある天井石のうち、南側の天井石は 77 t もの巨石を使用し、全体の重量は 2300 t に及ぶと推定されています。石室内からは凝灰岩片が出土しており、本来は家形石棺が安置されていたと考えられています。石舞台古墳の墳丘がいつ失われたのかははっきりとはわかりませんが、江戸時代に描かれた『西國三十三カ所名所圖會』の石舞台古墳は現在と同じような姿をしています。



図1 『西國三十三カ所名所圖會』

### 《調査歴》

1933（昭和8）年と1935（昭和10）年に京都大学考古学研究室の浜田耕作指導のもと、末永雅雄が発掘調査を実施しました。また、1954～1958年にかけて貼石の復元作業がおこなわれました。さらに1976年の奈良県立橿原考古学研究所による発掘調査により、石舞台古墳の外堤西北部から、7基以上の6世紀後半から末にかけての円墳や方墳が見つかり、これらの古墳を削って石舞台古墳が築造されていたことがわかりました。

### 《石舞台古墳の被葬者について》

1912（明治45）年に喜田貞吉の「蘇我馬子桃原墓の推定一稀有の大石槨、島の庄の石舞臺の研究」（『歴史地理』第19巻第4号）では、「種々の事情を綜合して而して之に対して此の墓が斯く日本に一二を争ふ程の巨大なるものなりとの事実は桃原墓との此の石舞臺とを接近せしむるに十分有力なる證據となるべきものなりとす。」として、石舞台古墳が蘇我馬子の桃原墓である可能性について言及しています。また、石舞台古墳に隣接する島庄遺跡では7世紀前半の大型掘立柱建物と方形池が検出されています。これが『日本書紀』推古34（626）年の条にある「飛鳥河の傍に家せり。仍ち庭の中に小なる池を開けり、仍りて小なる嶋を池の中に興く、故、時の人、嶋大臣と曰ふ。」の記述と合致する可能性が高いことから、周辺が馬子の支配下にあったことがわかります。

## シーン② 石舞台古墳下層の小規模古墳

### 《小規模古墳群の概要》

石舞台古墳の全貌を明らかにするための調査が、昭和50年代に行われました。石舞台古墳の外堤を調査した結果、石舞台古墳の下層にはいくつかの小規模古墳があったことが確認されました。つまり、これらの小規模古墳を破壊して石舞台古墳は造られたのです。

前述の橿原考古学研究所による調査で確認された小規模古墳は7基、墳形は円または方形で、埋葬施設は7基とも横穴式石室でした。1号墳が両袖式なのを除いて他はすべて片袖式のもので、古墳の規模は直径（または一辺）8～18mで遺物としては須恵器や耳環、釘などが出土しています。また、これらの古墳から出土した遺物や石室の形態から6世紀末頃の築造だと考えられ、石舞台古墳が作られる直前までこれらの古墳群の造営が継続していたことが分かります。

この古墳群は、東に位置する細川谷古墳群との関連が考えられています。細川谷古墳群は6世紀末～7世紀にかけての古墳が約200基存在する古墳群であり、このもっとも西に位置していたのが、石舞台古墳下層の小規模な古墳群であったと考えられます。

細川谷古墳群のような大規模な古墳群を形成できる豪族はかなりの有力集団であったと考えられますが、その一角を潰してまで石舞台古墳が築造されたことから、やはり石舞台古墳はその規模だけでなく、築造の背景からも大きな力をもった人物によって造られた古墳であったことが窺えます。

表1 小規模古墳群一覧

古墳名	墳形	規模	石室の形態	出土遺物
1号墳	円	約18m	両袖式横穴式石室	須恵器
2号墳	円	約8m	片袖式横穴式石室	なし
3号墳	円	約8m	片袖式横穴式石室	須恵器
4号墳	方	約10m	片袖式横穴式石室	須恵器・耳環
5号墳	円?	?	片袖式横穴式石室	釘
6号墳	円	約9m	片袖式横穴式石室	—
7号墳	方	?	片袖式横穴式石室	釘



図2 1976年の調査

## シーン③～⑥ 古代における木製の道具

### シーン③《畚（もっこ）》

畚とは、網の四隅に吊り紐を2本結び付けた道具のことです。吊り紐が作る環にオウゴという棒を通し、前後2人でそのオウゴを担いで、使用していました。主に土砂や荷物を運ぶことを目的としていました。畚の語源は、持籠（もちこ）という言葉の音便とされ、軽籠（もっこう）とも称します。

### シーン④《柄振（えぶり）》

柄振とは、長い柄の先に、下部が直線的な横板の身を貼り付けた形状の道具のことです。主に土塊を砕き、かき集め、地面を平坦にならす道具として使用されました。弥生時代初めの遺跡と考えられている佐賀県唐津市の菜畑遺跡の水田遺構から柄振が出土していることから、弥生時代にはすでに使われていたことが確認できます。

### 《鋤（すき）》

鋤とは、長い柄の先に、前面が徐々に丸みを帯びた身を貼り付けた形状の道具のことです。主に地面を掘り起こし、土砂等をかき寄せるのに使用されました。CGムービー中の説明にもありますように、はじめは全て木製で出来ていますが鉄器が普及することに伴って鉄製の刃をつけるものが出てきます。作り方の違いから一木で柄と身を作る一木鋤と、別木で作る組み合わせ鋤とに大別されています。

### シーン⑤《墨壺（すみつぼ）》

墨壺とは、墨を含ませた糸を弾くことで、木材などに正確な直線を引く道具のことです。現存する日本最古の墨壺は正倉院の小型墨壺です。基本的に建築の際に用いられることが多いのですが、東大寺の正倉院に所蔵されているもののように様々な装飾を施されたものもあります。

### ※地割

地割とは、地面の割振りをすること、地所を一定の基準によって区画することをいいます。条里制の施行に際しては、一定の耕地を方形・長方形に区画しました。一町方格の条里地割には、畦畔や水路を含み水田経営のために地形の傾斜や水流を考えて土地を区割りする必要性がありました。長地形や半折形の定形化した地割のために、坪内をどのように区分するかも重要な条件であり、坪内地割という語もあります。古墳の築造に関しては地面に杭を立てて区画をすることを意味しています。

### シーン⑥《手箕（てみ）》

手箕とは竹を網目状に編んで作った道具のことです。田畑で収穫物を運ぶ時や選別するとき、土を運ぶ時などさまざまな用途で使われる道具です。

現在の発掘調査においてもプラスチック製の箕を土運びの道具として使用しています。



## シーン⑦ はつり

一般的に「はつり」とは「削り」と書き、字のごとく削ることを表します。古墳築造においては、石室を造っていく際に、不整形な石を綺麗に積めるようにある程度整形しなければなりません。多くの場合は砕いたりして形を整えていきますが、最終的に石室壁面を整える作業では「はつり」が行われます。基本的には先が平たいたがねを使ってハンマーで叩き削っていったと考えられます。現代でも、建築などでコンクリートを削るときに「はつり」という用語が用いられますが、作業の内容はほとんど変わりません。

## シーン⑧ 修羅（しゅら）

### 《修羅》

修羅とは、巨石を運搬するため使われたソリのことです。コロと呼ばれる丸太を用いることにより、地面との摩擦抵抗を軽減し、より少ない労働力での運搬が可能となりました。古くから世界的に用いられ、エジプトのピラミッドの石材運搬にも使用されたことが壁画からわかっています。近代的な運搬道具が発明されるまでは、巨大な物体の運搬は古代と変わらず修羅を用いていました。安土桃山時代から戦国時代にかけての城造りにおいて、石垣の巨石を運ぶ際に修羅が用いられたことは当時の絵巻物からもみてとれます。

実際に日本では、大阪府藤井寺市の三ツ塚古墳の周濠底部から大小2基の修羅（長さ 8.8mと 2.9m）が発見されました。材質は、大型品はアカガシ、小型品がクヌギとされています。また、同時に長さ 6.2mの梶子棒も発見されました。出土場所が古市古墳群内ということから、5世紀頃のものとされています。

これまで修羅が完形で出土したことはなく、非常に良好な状態での発見であったため、古代の巨石運搬技術の研究に大きく貢献しました。

三ツ塚古墳から出土した大修羅と梶子棒は保存処理後、大阪府立近つ飛鳥博物館に展示されています。小修羅は同じく保存処理後、藤井寺市立図書館に展示されています。



図3 三ツ塚古墳周濠出土の修羅

## 《古代の運搬具について》

古代においてモノなどを運ぶために使われた運搬具をいくつか紹介します。

### ・手持ち運搬具

人力による運搬方法の中で、最も基本的な方法です。物資を片手で持つ場合と両手で持つ場合とに分けることができ、さらに手抱え運搬と手提げ運搬に分類することができます。ほとんどの場合、形として残らず、残ったとしても有機物が多いため、遺物として現在まで伝わっていません。わずかに残っている例をあげると、古墳の墳丘を飾る埴輪があります。群馬県高崎市の綿貫観音山古墳出土の「革袋を捧げ持つ女性」や群馬県太田市の塚廻り四号墳出土の「坏を片手に捧げ持つ女性」などをあげることができますが、現在確認されているのは女性を表現した埴輪がほとんどです。



図4 担ぐ男子形埴輪

### ・頭上運搬

物資を直接、もしくは容器を頭上に載せて運搬する方法です。日本においては、中・近世では男性も行っていたことが絵巻物などでも知られていますが、近代では女性に限られているようです。古代では、栃木県真岡市の鶏塚古墳出土「頭に壺を乗せ、子を背負う女性」や埼玉県児玉郡美里町の猪俣南二号墳出土「頭に壺を載せる女性」などがありますが、いずれも女性に限られています。運搬具が発達していなかった時代は狭い起伏地で液体を運ぶための最適な手段とされていました。

### ・背負運搬

荷物を背中に負って運搬する方法で、人力運搬の中で最も普遍的に行われています。荷物が背中に密着し、両手が自由になる点が利点です。考古資料では、矢を入れて背中に負う容器である鞆があります。滋賀県東近江市の雪野山古墳や福島県会津若松市の会津大塚山古墳からは革製と布製の鞆が確認されています。また鞆をかたどった鞆形埴輪では矢筒部とともに背板が表現されており、奈良県御所市の室宮山古墳（室大墓）で出土したものが有名です。更に群馬県飯塚出土の人物埴輪や埼玉県比企郡嵐山町の古里古墳群の武人埴輪は背に鞆を負う姿が表現されています。



図5 鞆型埴輪

### ・船による運搬

古代より、大量の荷物を運搬する際に最少の労働力で行う最も有効な方法は船です。船はその構造から、刳舟と準構造船、構造船に分けることができます。刳舟は木を刳り貫いただけのもので縄文時代にはすでに出現していたことが遺跡から出土する遺物からわかっています。準構造船は刳舟を底材とし、舷側板を継ぎ足して舷を高くし、波による破損を防ぐことや積載量の増加を可能にしたものです。土器や装飾古墳、埴輪などに表現されていますが、実物が出土することはあまりありません。構造船は準構造船にさらに厚板を組み合わせた大型の舟で『日本書紀』などにその造船記事が見られます。

## シーン⑨ 盛土

版築の初現は中国の殷代とされています。日本にその技術が伝来したのは6～7世紀ですが、中国と日本では版築の概念がやや異なります。日本の版築とは、2枚の堰板を並行して長手においた間に土を入れ、搗棒でつき固めものを指します。

ほとんどの古墳は土を高く盛って墳丘を築いています。弥生時代に築かれた方形周溝墓や方形台状墓は多少の盛土を行っていますが、古墳時代を代表する前方後円墳の盛土に比べると土量は少なくなっています。大王墓と考えられる大和・河内の大型前方後円墳のほとんどは墳丘に段を設け、急勾配な斜面を形成していますが、これは単に土を盛るだけでは成立しない構造となっています。土を盛る際に、土を突き固めるという技術を導入することで可能となる構造なのです。

この盛土技術をさらに発展させたのが、主に6～7世紀に築かれた終末期古墳の墳丘に用いられる版築工法です。特に飛鳥地域に位置する終末期古墳は、土の厚さ2～3cmと非常に緻密です。高松塚古墳では、版築の表面から土を突き固めるための搗棒やムシロ状編物の痕跡が検出されました。他にも飛鳥寺などの寺院の基壇にも版築が用いられています。

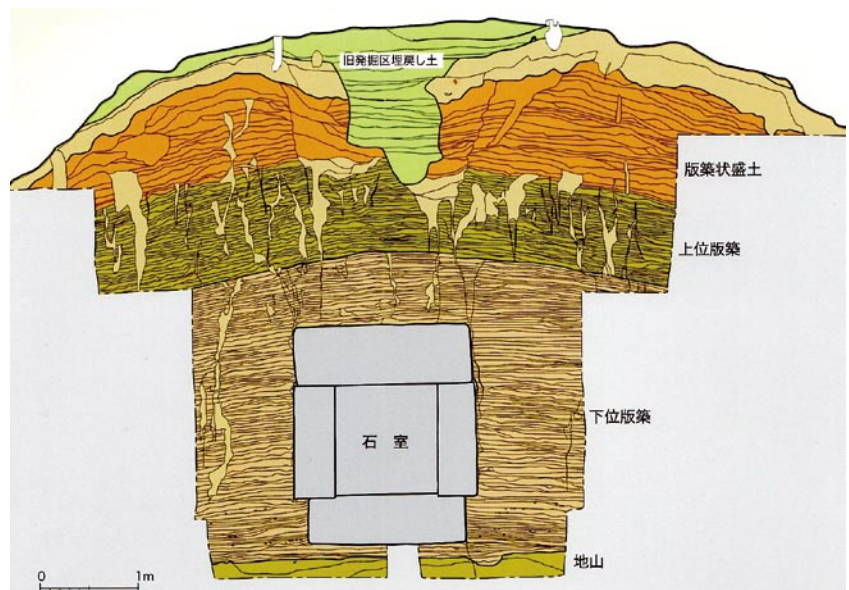


図6 高松塚古墳墳丘断面図

## シーン⑩ 搗棒 (つきぼう)



図7 搗棒の痕跡

搗棒とは、版築を行う際に使用する道具です。材質が木製であったと考えられるため、現在まで残っていません。ただし高松塚古墳では版築に直径約3cmの棒を突いた痕跡が確認されています。現在は、使用痕跡しか確認されていないため、搗棒の出土など今後の資料増加に期待するしかありません。

## シーン⑪ 貼石

石舞台古墳では、発掘調査により、濠と墳丘の斜面には30～80cm大の花崗岩の貼石が施されていることが判明しました。古墳の外観装飾として有名な葺石とは異なる石材の使用方法です。貼石と葺石の違いは、積み方で判断するケースが多く、葺石は下の石の上に上の石が重なりながら積み上げられていくのに対し、貼石は下の石と上の石の端辺が接するように並べられています。石舞台古墳の貼石は、平らな面を揃えて貼り付けられており、大きさの面からもそれまでの葺石とは大きく異なります。葺石は10cm～人頭大程度の河川や山間地で採取できる礫を使用しています。その初現は吉備地方などで確認されている弥生墳丘墓の墳丘裾にめぐらされた列石であるといわれています。墳丘に石を施す理由としては、墳丘と他の空間を区別して神聖化を図るためや風雨によって墳丘の盛土が流出するのを防ぐため、外観を荘厳にするためなどとされています。石舞台古墳が築かれた時代である6～7世紀の古墳では、墳丘を貼石で装飾する例が非常に多く、明日香村の梅山古墳（宮内庁治定欽明天皇陵）や同生駒郡平群町の西宮古墳は花崗岩、同天理市の峯塚古墳では天理砂岩、明日香村の野口王墓古墳（宮内庁治定天武・持統天皇陵）と牽牛子塚古墳では二上山凝灰岩が確認されています。

葺石や貼石は、街道沿いなどの墳丘を見せようとする側には比較的大きな石材を利用し、見えない側には小さな石を使うケースが多くなっています。これは古墳を対外的に立派に見せるように築いたものであることを示しています。



図8 石舞台古墳の貼石

### ※段築

古墳を築造する際、ただ土を盛るだけだと、大きな古墳になるほど土が崩れやすくなります。この対応策として墳丘表面に人頭大の石を葺く葺石などが知られていますが、テラス（平坦面）を設け、段築を用いることにより、さらに墳丘の強度を高めるとされています。また、テラス面には埴輪列が並べられるケースが多く、そうした祭祀的儀礼を行う場として設けられたとも考えられます。さらに段築を設けることで、傾斜を緩やかにし、築造作業を行いやすくするという効果もあると考えられます。前方後円墳の初段階に位置づけられる奈良県桜井市箸墓古墳では、五段築成が用いられていますが、前期古墳においては四段築成、三段築成が一般的です。中期古墳になると、大阪府堺市の大山古墳（宮内庁治定仁徳天皇陵）のような三段築成が一般的となりますが、後期になるとその原則は崩れます。石舞台古墳は墳丘が削られているため、実際に何段築成であったかなどは想像の範囲ですが、一段目が方形であることや、その規模、同時代の古墳からも二段築成である可能性が最も高いと考えられています。



成、三段築成が一般的です。中期古墳になると、大阪府堺市の大山古墳（宮内庁治定仁徳天皇陵）のような三段築成が一般的となりますが、後期になるとその原則は崩れます。石舞台古墳は墳丘が削られているため、実際に何段築成であったかなどは想像の範囲ですが、一段目が方形であることや、その規模、同時代の古墳からも二段築成である可能性が最も高いと考えられています。

図9 復元された高松塚古墳の墳丘

## シーン⑫ 棺

### 《概要》

棺は遺体を納めるための空間で、古くからその存在が確認されています。棺の形態も時代により様々であり、木棺のように縄文時代から現代まで続くものもあれば、ある特定の期間にしか使用されなかったものも存在します。ここでは石舞台古墳が築かれた時代前後の棺をいくつか紹介しましょう。

### 《甕棺》

弥生時代に見られるような棺専用の甕ではなく、土師器と須恵器の大型の甕を用いて棺として利用しています。古墳時代では類例が少ないのが現状です。



図 10 甕棺

### 《割竹形木棺》

一本の木を縦に分割し、それぞれ中を削り貫いて蓋と身をつくります。主に竪穴式石室に納められています。典型的なものは長さ4～8m、幅0.8mですが、ほとんどが腐朽、消滅しているため、埋葬施設の床面（棺床）の形状から判断するケースが多くなっています。材質はほとんどが日本固有種のコウヤマキですが、スギ、ヒノキ、ケヤキなどもみられます。朝鮮半島の王陵の棺にもコウヤマキが使用されており、『三国史記』や『三国遺事』文献に記載されている通り、武寧王と日本には深い関係にあることが判明しました。

### 《長持形石棺》

古墳時代中期の大王墓級の古墳に採用された組合せ式の石棺です。形状が衣類などを納める長持に似ていることからこのような名称となりました。蓋石1枚で、身は底石1枚と長短両側石各2枚の合計6枚からなります。石材はほとんどが兵庫県の加古川下流域で産出する竜山石です。



図 11 長持形石棺

### 《割竹形石棺》



一石を削り貫いて蓋と身をつくり、それぞれに縄掛突起を施しています。割竹形木棺を模しており、主に4世紀中頃につくられます。類例が非常に少なく、堺市の二本木古墳など、畿内に分布します。

図 12 割竹形石棺

### 《舟形石棺》

割竹形石棺と同様に一石を刳り貫いて蓋と身をつくり、縄掛突起を施しています。割竹形石棺と違い、蓋と身を合わせた横断面がやや扁平で、両端が凸湾曲面となっています。ただし、両者とも同じ系譜と考えられているため、明確な区分ができない場合もあります。畿内での事例はほとんどなく、四国や九州、北陸、関東といった地方で多く確認されているのが特徴です。それぞれの石棺は石材の産出地付近で、古墳時代前期後半から中期にかけての首長墓に納められていたため、地方の首長の棺としての性格が強いといえるでしょう。

### 《陶棺》

古墳時代後期に流行した粘土製の棺で、土師質と須恵質のものがあります。主に横穴墓に納められます。形状から亀甲形陶棺と四注式家形陶棺に分類されます。いずれも棺身は箱形を呈し、円筒形の脚が2～3列に並び、棺身と蓋とも前後に二分して焼成されます。陶棺は河内、大和、吉備に分布し、特に吉備での出土例が多くなっています。最近では奈良県奈良市の赤田横穴墓群で数基確認されています。



図 13 陶棺

### 《家形石棺》

棺蓋が寄棟造りの家屋に似ていることからこの名称がつけられ、主に古墳時代後期以降に使用されました。大きく刳り貫き式と組合せ式の二つに分類することができ、組合せ式も身が一石か複数かに分けられます。これらにランクをつけると、刳り貫き式が最も位が高く、蓋が組合せで身が一石の型式が次に続き、蓋と身の両方が組合せの型式が最も劣ります。また蓋には縄掛突起と呼ばれる突起があります。時代が下るにつれて突起が変化し、7世紀中頃になると消滅します。さらに蓋の天井部も時代が下るにつれて平坦面が広がっていきます。東北地方の北部を除く日本列島各地に分布し、地域毎に形状や材質が異なります。材質は二上山凝灰岩や竜山石、阿蘇溶解凝灰岩、花崗岩などがあります。奈良県生駒郡斑鳩町の藤ノ木古墳のように石棺前面に朱を施したものや奈良県橿原市の菖蒲池古墳のように内面に漆を塗っているものもあります。多くの家形石棺は横穴式石室に納められますが、滋賀県高島市の鴨稻荷山古墳や和歌山県和歌山市の大谷古墳など、墳丘に直接埋葬されるものもあります。大王墓をはじめ、小規模な古墳にも採用されていることから、この時代を代表する棺と言っても過言ではないでしょう。



図 14 家形石棺

### 《夾紵棺（きょうちょかん）》

棺の原型に漆と布（絹・麻）を交互に重ね合わせ、その厚さを2～3cmまで作りあげ、原型を取り外して製作された棺です。出土例では外面は黒漆で、内面は赤漆で装飾されているようです。出土例は、牽牛子塚古墳、大阪府高槻市の阿武山古墳などがあります。そのほかにも野口王墓古墳、大阪府南河内郡太子町の叡福寺北古墳（宮内庁治定聖徳太子墓）でも存在すると考えられています。これらから、夾紵棺を有する古墳の被葬者はいずれも天皇、もしくはそれに準ずるものと考えられています。

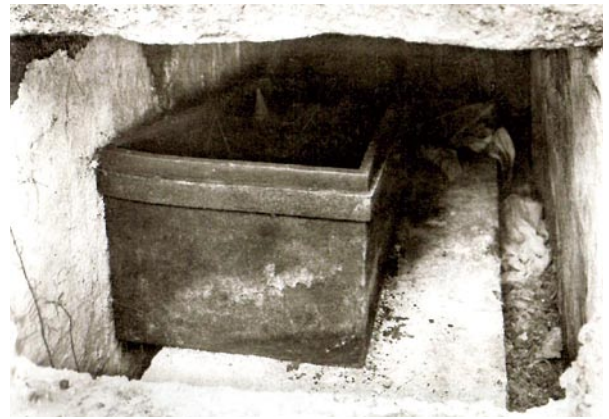


図 15 夾紵棺

表 2 夾紵棺出土古墳一覧（推定・伝承を含む）

古墳名	所在地	墳形	考えられる主な被葬者
牽牛子塚古墳	奈良県明日香村	八角墳	齊明天皇・間人皇女
野口王墓古墳	奈良県明日香村	八角墳	天武天皇・持統天皇
叡福寺北古墳	大阪府太子町	円墳	聖徳太子
阿武山古墳	大阪府高槻市	無墳丘	藤原鎌足

### 《漆塗木棺》

原型を用いず、木心に漆と布を施す棺です。漆と布だけを用いて製作された夾紵棺に比べ、木心を使い、漆と布の量が減ることから、やや劣る構造となっています。主に7世紀の古墳に納められていたとされます。

表 3 漆塗木棺出土古墳一覧

古墳名	所在地	墳形	考えられる主な被葬者
越塚御門古墳	奈良県明日香村	方墳？	大田皇女
高松塚古墳	奈良県明日香村	円墳	石上麻呂、忍壁皇子
キトラ古墳	奈良県明日香村	円墳	阿倍御主人、刑部皇子
マルコ山古墳	奈良県明日香村	六角墳？	川嶋皇子、高級官僚
カヅマヤマ古墳	奈良県明日香村	方墳	百済系王族
平野塚穴山古墳	奈良県香芝市	円墳	茅渟王
石のカラト古墳	奈良県奈良市	上円下方墳	高級官僚
初田 2 号墳	大阪府茨木市	円墳	
アカハゲ古墳	大阪府河南町	方墳	渡来系氏族
シシヨツカ古墳	大阪府河南町	方墳	渡来系氏族
ツカマリ古墳	大阪府河南町	方墳	渡来系氏族
御嶺山古墳	大阪府太子町	円墳？	皇族
岩内 1 号墳	和歌山県御坊市	方墳	有間皇子

※アカハゲ古墳、シシヨツカ古墳は、漆塗籠棺

## 古墳に関する基礎的知識

### 《墳丘》

古墳にはさまざまな形が存在し、墳形の違いがどのような意味を表しているのかは詳しく解明されていませんが、これまでの研究によってある程度の特徴が見て取れます。

#### 【前方後円墳】

ヤマト王権の所在した奈良、大阪を中心に大型の古墳が営まれ、その大部分が前方後円墳です。名称の由来は蒲生君平の『山陵記』に「上古の御陵は宮車の形をまねて前方後円とし、三段の壇をつくり、周囲に濠をめぐらしている」と書かれたことから、前方後円墳と呼ばれるようになりました。なぜ「前方」「後円」なのかというと、宮車を上から見たときに、後ろ側である車輪部分が円であるため後ろが円と見なされ、前方後円となったようです。

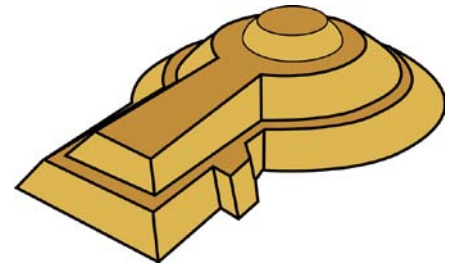


図 16 前方後円墳

前方後円墳は特に畿内を中心に大型の古墳群として集まり（大和古墳群・佐紀盾列古墳群・馬見古墳群・古市古墳群・百舌鳥古墳群など）、その分布は次第に各地域へ広がっていきました。しかしながら、6世紀代に入ると橿原市の五条野丸山古墳や梅山古墳などを最後に突如として前方後円墳は終焉を迎えます。これは薄葬思想が広まったためなどと考えられていますが、詳しいことは明らかになっていません。

最大の前方後円墳としては大山古墳で 486m です。古墳規模のランキングをみると上位 46 位までがすべて前方後円墳であることから、王者の墳形と言えるでしょう。

#### 【前方後方墳】

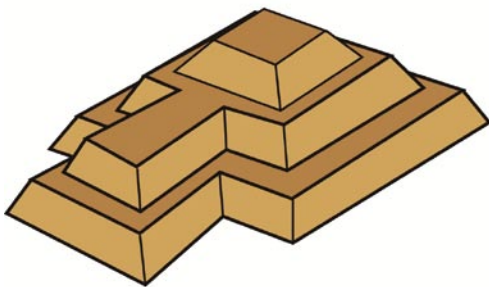


図 17 前方後方墳

古墳時代前期において、大型の前方後円墳が畿内で営まれる中、東海地方などでは前方後方墳が築かれました。これは、畿内勢力と対立関係にあったとする説や、前方後円墳には及ばない権力者の墳形とする説などがあり、意見はまとまっていません。

例えば東海地方で見ると、古墳時代前期においては、畿

内と異なり、明らかに前方後方墳の分布が多く見られます。しかし、4世紀後半頃になると岐阜・静岡・愛知といった前方後方墳を営んでいた地域で、突如として前方後円墳が営まれはじめ、その後前方後方墳は姿を消していきます。

最大のものは天理市の西山古墳（前期）で 185m です。



図 18 雨の宮 1号墳



### 【円墳】



図 19 円墳

円墳はその名の通り円形を呈した古墳です。最もポピュラーな墳形であるといわれています。古墳時代中期から終末期にかけての群集墳の多くもこの墳形を採用しています。最大のものは埼玉県行田市の丸墓山古墳（後期）で直径 102m です。

### 【方墳】

方形を呈した古墳で、正方形または長方形です。古墳時代前期では弥生時代終末期の方形周溝墓とよばれる墳墓から発展したものであると考えられており、古墳時代中期では単独の方墳とともに、大型の前方後円墳の陪塚として方墳が造られるようになります。

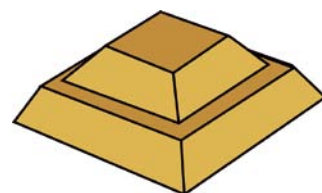


図 20 方墳



図 21 春日向山古墳

石舞台古墳の時代である古墳時代後期から終末期の古墳では、前方後円墳などの大型古墳が作られなくなったため、盛んに方墳が造られます。また石舞台古墳が蘇我馬子の墓と推定されているように、飛鳥地域の方墳に限っては蘇我氏との関わりの強い人物の墓である可能性が研究者によって示唆されています。

方墳で最大のものは橿原市の榊山古墳（中期）で、一辺約 90m です。

### 【上円下方墳】

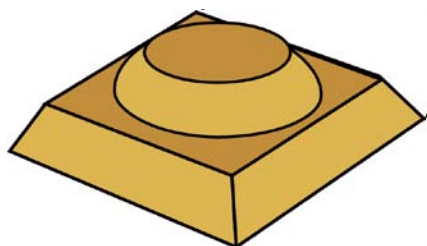


図 22 上円下方墳

この墳形は古墳の下段が方形で上段が円形を呈しています。珍しい墳形であり例がなく、最も有名な例としては、奈良市の石のカラト古墳があります。内部構造は高松塚古墳やキトラ古墳と同じ組合式の横口式石槨で 7 世紀後半以降の古墳であると考えられています。上円下方という形は、飛鳥・奈良時代に唐との関わりが深かったことから、古代中国の宇宙観を表す「天円地方」を模しているのではないかと考えられています。この「天円地方」の考え方を示しているものとして、中国紫禁城の天壇が有名です。近年では、明治天皇、大正天皇、昭和天皇の歴代陵墓もこの上円下方墳を採用しています。



図 23 石のカラト古墳

### 【八角墳】

古墳時代前期から後期にかけては大きい古墳であることが権力を示していましたが、後期以降（6世紀代）になると、次第に薄葬の傾向となり、それまで首長が用いてきた前方後円墳も終焉を迎えます。

そのような背景で八角墳が登場します。八角墳と被葬者が一致した例としてはまず、野口王墓古墳があります。天武天皇と持統天皇は文献をみると合葬されたことが知られており、持統天皇は火葬されたと記述されています。また鎌倉時代の盗掘記録である『阿不幾乃山陵記』には、野口王墓に漆塗木棺と金銅製容器があったこととともに、墳丘は八角で五段を呈していたことが記されており、これを天武・持統天皇陵と見なすことは研究者の間でも認められています。

さらに発掘調査の成果などから、桜井市の段ノ塚古墳（宮内庁治定舒明天皇陵）、京都市の御廟野古墳（宮内庁治定天智天皇陵）、明日香村の牽牛子塚古墳・中尾山古墳も八角墳に当てられることから、舒明以降の天皇陵で八角形が意識的に採用されていた可能性は高いとされています。なお、宮内庁治定の斉明、文武陵に関しては異論が多くあり、発掘調査の成果などから牽牛子塚古墳が斉明陵、中尾山古墳が文武陵ではないかとする意見もあります。

また兵庫県宝塚市の中山荘園古墳のように、地方にも八角墳はいくつか存在しますが、7世紀代に宮の置かれた飛鳥地域（一部は山城に所在）以外の八角墳が、直接天皇などと結びつきのある人物だと想定することは、様々な資料から困難とされています。

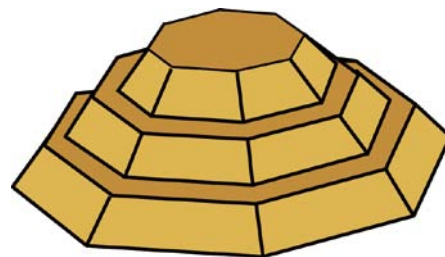


図 24 八角墳

### 【その他の墳形】

その他の墳形としてはまず、前方後円墳の前方部がもう一つあるような形の双方中円墳があります。珍しい墳形であり天理市の櫛山古墳が最も有名です。

次に円墳が二つ並んだ形の双円墳があります。この代表例は大阪府南河内郡河南町の金山古墳ですが、朝鮮半島最大の古墳である皇南大塚もこの墳形です。双方墳と呼ばれる古墳が太子町の二子塚古墳です。これは本来方墳であったのが、後世の改変により、方墳が二つ合わさったような形状となってしまったものであると考えられています。

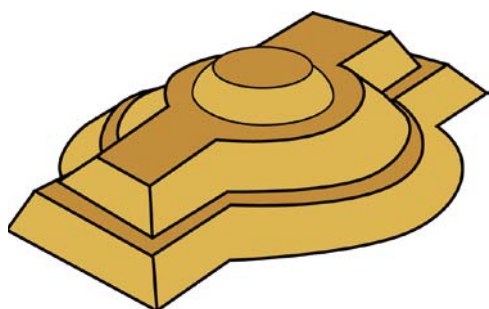


図 25 双方中円墳



図 26 金山古墳

## 《古墳の規模と所在地》

表4 古墳の規模と所在地

	古墳名	全長	所在地
1	大山古墳（仁徳天皇陵）	486m	大阪府堺市
2	誉田御廟山古墳（応神天皇陵）	425m	大阪府羽曳野市
3	上石津ミサンザイ古墳（履中天皇陵）	365m	大阪府堺市
4	造山古墳	360m	岡山県岡山市
5	河内大塚山古墳（陵墓参考地）	335m	大阪府羽曳野市 大阪府松原市
6	五条野丸山古墳（陵墓参考地）	320m	奈良県橿原市
7	渋谷向山古墳（景行天皇陵）	300m	奈良県天理市
8	土師ニサンザイ古墳（陵墓参考地）	290m	大阪府堺市
9	仲津山古墳（仲津媛陵）	290m	大阪府藤井寺市
10	作山古墳	286m	岡山県総社市
11	箸墓古墳（倭迹迹日百襲姫命陵）	278m	奈良県桜井市
12	五社神古墳（神功皇后陵）	267m	奈良県奈良市
13	ウワナベ古墳（陵墓参考地）	255m	奈良県奈良市
14	市庭古墳（平城天皇陵）	250m	奈良県奈良市
15	行燈山古墳（崇神天皇陵）	242m	奈良県天理市
16	岡ミサンザイ古墳（仲哀天皇陵）	242m	大阪府藤井寺市
17	室宮山古墳	238m	奈良県御所市
18	メスリ山古墳	235m	奈良県桜井市
19	西殿塚古墳（手白香皇女陵）	230m	奈良県天理市
20	宝来山古墳（垂仁天皇陵）	230m	奈良県奈良市
21	市野山古墳（允恭天皇陵）	230m	大阪府藤井寺市
22	太田茶臼山古墳（継体天皇陵）	226m	大阪府茨木市
23	古市墓山古墳（応神天皇陵 陪塚）	225m	大阪府羽曳野市
24	巢山古墳	220m	奈良県広陵町
25	ヒシャゲ古墳（磐之媛陵）	219m	奈良県奈良市
26	築山古墳（陵墓参考地）	210m	奈良県大和高田市
27	太田天神山古墳	210m	群馬県太田市
28	西陵古墳	210m	大阪府岬町
29	津堂城山古墳（陵墓参考地）	208m	大阪府藤井寺市
30	佐紀石塚山古墳（成務天皇陵）	204m	奈良県奈良市
31	コナベ古墳（陵墓参考地）	204m	奈良県奈良市

※古墳名のあとの（ ）は現在宮内庁が治定している天皇陵です。

## 《石舞台古墳築造前後の古墳一覧》

石舞台古墳が築かれた時代の前後である6世紀後半から7世紀中頃までの大和と河内における古墳を、墳形別の大きさでみてみましょう。多くの古墳が築かれた中でも一辺が約50mの石舞台古墳はかなりの規模を有していることがわかります。

### 【方墳】

表5 方墳の規模と所在地

古墳名	規模	所在地	補記
春日向山古墳	一辺 66×60m	大阪府太子町	宮内庁治定用明天皇陵。
山田高塚古墳	一辺 66×58m	大阪府太子町	宮内庁治定推古天皇陵。
塚穴古墳	一辺 54m	大阪府羽曳野市	宮内庁治定来目皇子墓。
シシヨツカ古墳	一辺 60×53m	大阪府河南町	
石舞台古墳	一辺 50m	奈良県明日香村	蘇我馬子墓の可能性が高い。
ハミ塚古墳	一辺 48.8×45.6m	奈良県天理市	
赤坂天王山古墳	一辺 45m	奈良県桜井市	崇峻天皇陵の可能性が高い。
岩屋山古墳	一辺 35m	奈良県明日香村	
谷首古墳	一辺 40m	奈良県桜井市	
茅原狐塚古墳	一辺 40m	奈良県桜井市	
植山古墳	一辺 40×27m	奈良県橿原市	推古天皇初葬墓の可能性が高い。
カナヅカ古墳	一辺 35m	奈良県明日香村	宮内庁治定欽明天皇檜隈坂合陵陪塚ろ号。
小谷古墳	一辺 35m	奈良県橿原市	
コロコロ山古墳	一辺 30m	奈良県桜井市	
都塚古墳	一辺 30m	奈良県明日香村	

### 【円墳】

表6 円墳の規模と所在地

古墳名	規模	所在地	補記
塚穴山古墳	直径 63.4m	奈良県天理市	
牧野古墳	直径 55m	奈良県広陵町	押坂彦人大兄皇子墓の可能性が高い。
叡福寺北古墳	直径 54m	大阪府太子町	宮内庁治定聖徳太子墓。
藤ノ木古墳	直径 48m	奈良県斑鳩町	
ムネサカ一号墳	直径 45m	奈良県桜井市	
越塚古墳	直径 43.5m	奈良県桜井市	
峯塚古墳	直径 35m	奈良県天理市	
立子塚古墳	直径 20m	奈良県桜井市	

## 《埋葬施設》

### 【竪穴式石槨】

竪穴式石槨（室）は、日本の古墳時代の前期と中期に造られ、その時代の権力をもった豪族や首長を埋葬するための石槨です。内部には木棺や石棺などに遺体を入れ、棺を竪穴式石槨内に安置しました。副葬品として、鏡や武器、武具、勾玉などが棺の中や棺の上などに置かれていました。

竪穴式石槨は棺が一つしか入らないため、埋葬者は基本的に一人であると考えられています。また、棺を安置した後は、天井を巨大な石を使って蓋をしてしまうため、石槨内部には二度と入れないようになっています。

また竪穴式石槨は図 27 のような構造となっています。古墳の頂上から墓壙と呼ばれる大きな高壙を掘り、その中に竪穴式石槨が造られます。墓壙内部の底には、木棺が動かないようにするための粘土棺床が設置され、その周りを囲むように長方形で細長い板石という石を使い、底から積み上げていきます。積み上げていくときに、少しずつ板石を迫り出し、天井を狭くしてドームのように積み上げます。これは積んでいる板石の重さを分散させるためや上から侵入してくる雨水などの水を木棺から遠ざけるためにこのような構造であると考えられています。また、墓壙の底には礫を敷いて、雨水などで溜まった水を外に排水する機能を持ったものもあります。このように、竪穴式石槨は石の積み方や排水構造など古墳時代の最先端の技術を使用して造られています。

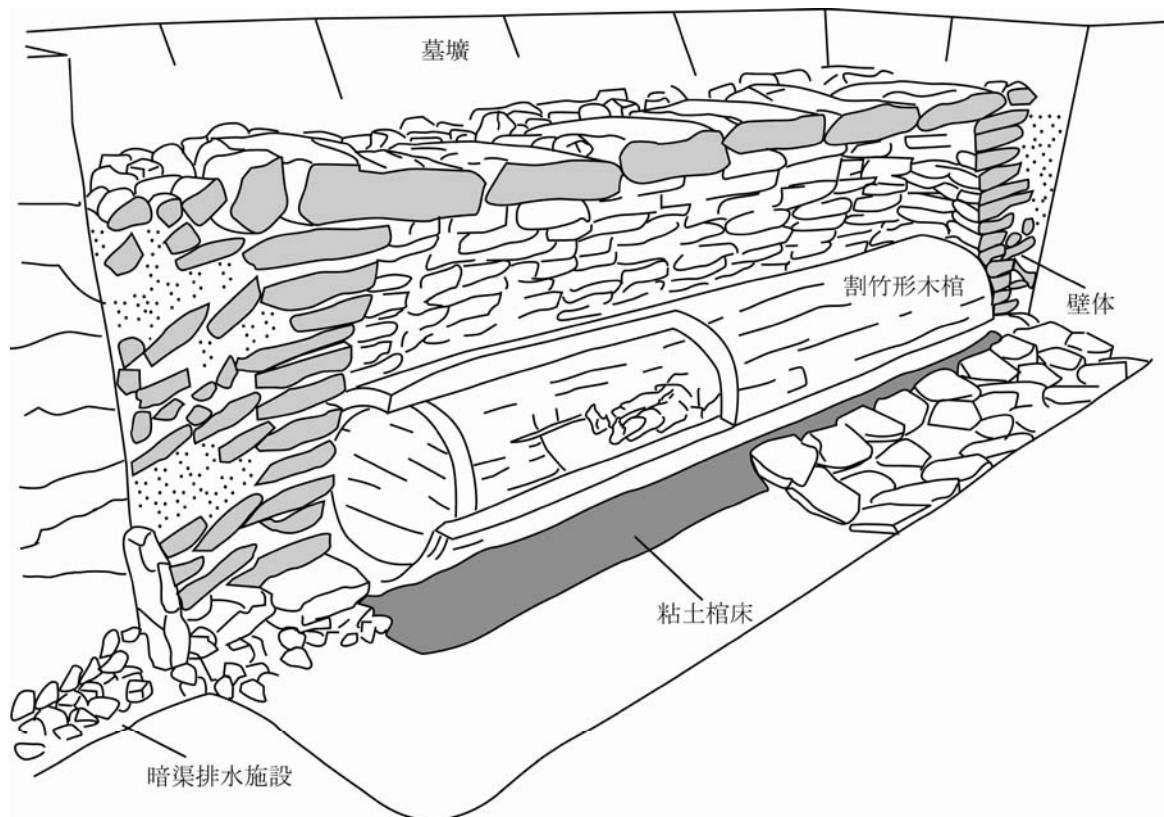


図 27 竪穴式石槨の各部名称

## 【横穴式石室】

横穴式石室は古墳時代後期に、それまで一人の埋葬を基本とした竪穴式石槨にかわって登場した石室形態です。基本的には、埋葬者をおさめる空間である玄室（奥室）、玄室に至るまでの通路である羨道とで構成されています。玄室には基本的に石棺が安置されています。また、羨道の幅よりも玄室の幅の方が一般的には広くなり、これは玄室をより広く見せる効果があります。この玄室入り口で左右に広がり（袖）があるものを両袖式、片側だけのものを片袖式、羨道と玄室の幅が同じで袖のないものを無袖式と呼んでいます。竪穴式石槨は埋葬後、石で完全に覆ってしまいましたが、横穴式石室は横に穴を開け羨道を設けることで、一度埋葬を行った後でも再び埋葬を行うことが出来ます。これを追葬と言います。この利点を利用して二人以上が一つの古墳に収められることが出来るようになりましたが、だからといって一人の埋葬をしなくなったわけではありません。一部では一つの棺しか確認されていない古墳も存在します。初期の横穴式石室は、4世紀後半に九州地方を中心に分布を見せ始め、当初は人頭大程度の割石を積んで作っていました。そして時代が下り石舞台古墳の時期になると、同じ割石でも巨石を用いるようになります。石舞台古墳でいえば、最も大きい天井石で77t、石室の総重量は2300tになると推定されています。それからやや時代が下ると、明日香村の岩屋山古墳のような表面が綺麗に磨かれた切石を積んだ石室へと変化していきます。

また、石舞台古墳は巨大な石室をもつ古墳として有名ですが、高さに関して言えば、石舞台古墳が4.7mであるのに対して、奈良県高市郡高取町の乾城古墳が5.27mで奈良県において最も高いとして知られています。巨石の使用や加工技術などから、やはり石舞台古墳の築造に注がれた労働人口は他を圧倒するものと思われます。

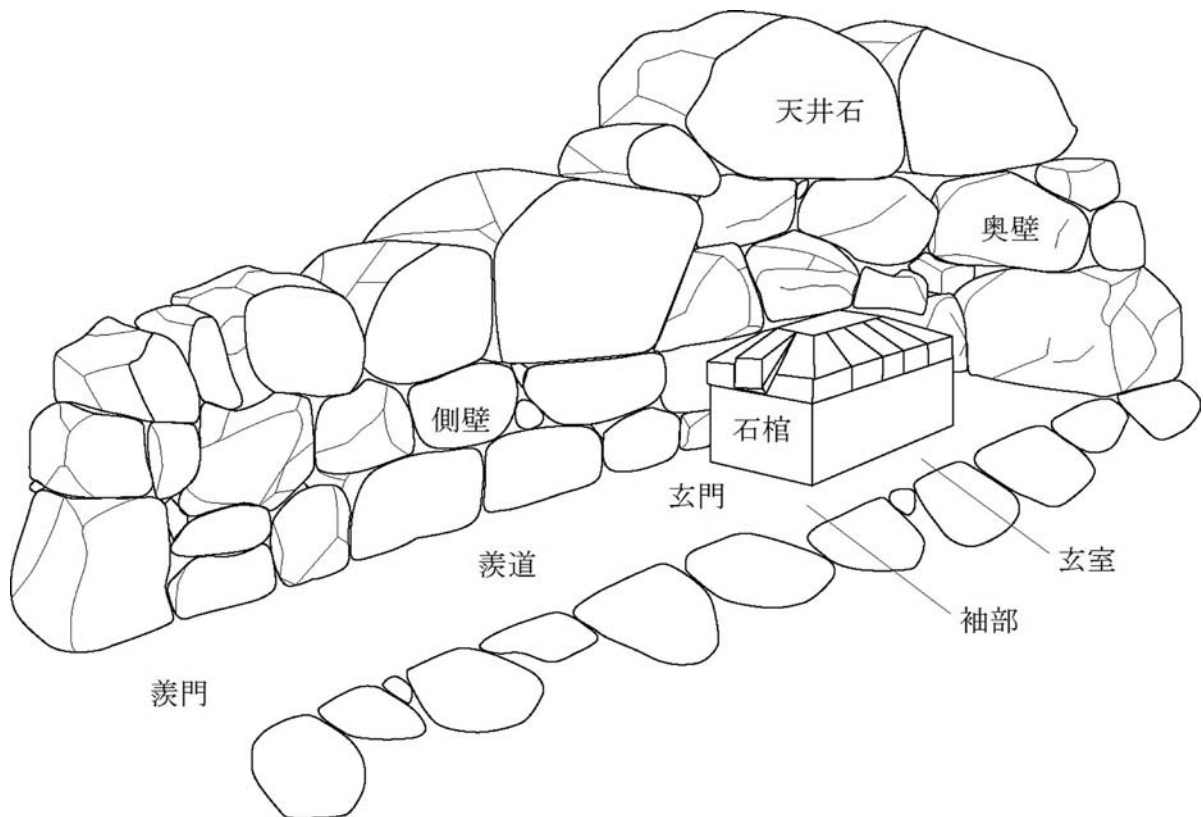


図 28 横穴式石室の各部名称

# 蘇我四代時代

## 《蘇我氏と天皇家の系図》

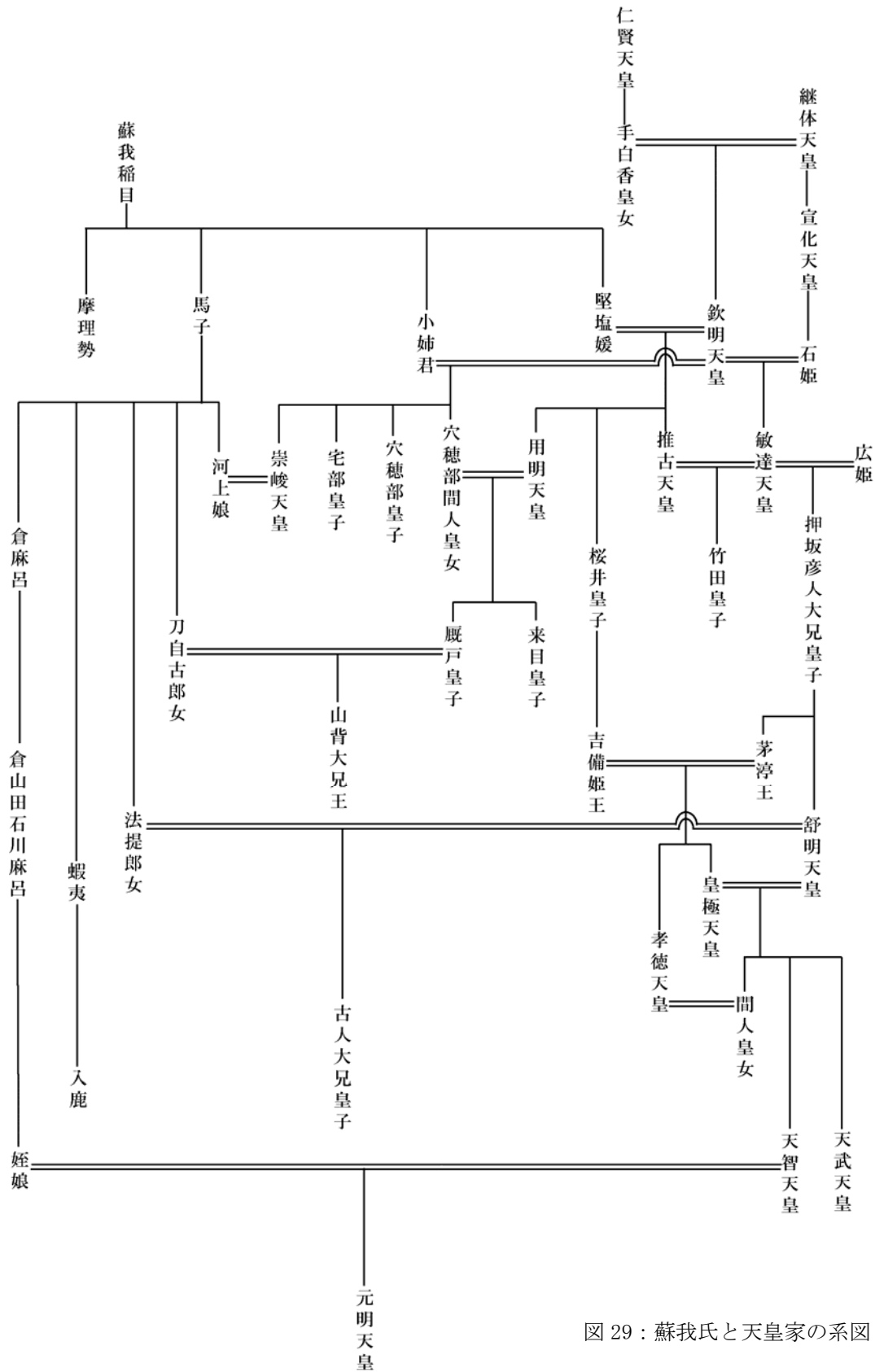


図 29：蘇我氏と天皇家の系図

## 《蘇我四代時代の概要》

### 【稲目の時代】

蘇我氏が歴史の表舞台に登場するのは6世紀になってからです。536年に大臣に就任した蘇我稲目は配下にある渡来人の知識や技術、経済力を背景にみるみる権力を握るようになりました。ついには自らの娘と欽明天皇の婚姻関係を結ぶようになり、権力繁栄の基礎を作りました。欽明は継体天皇と手白香皇女の間生まれ、百済の聖明王からの仏教公伝や任那復興といった事業を展開します。稲目は仏教受容にあたって廃仏派の物部氏と争い、仏教受容を積極的に支持しましたが、570年に亡くなります。稲目の墓に関する記述は文献には記載されていませんが、五条野丸山古墳とする説が有力となっています。稲目が亡くなり、その翌年に欽明も没します。欽明の墓については墳丘の巨大さなどから五条野丸山古墳とする説がありますが、『日本書紀』の記述などから梅山古墳とする説が有力です。ただし真の欽明陵をめぐる論争は今も続いています。

### 【馬子の時代】

次に即位したのは欽明と石姫のあいだに生まれた敏達天皇です。敏達の代に稲目の息子である蘇我馬子が大いに就任しました。馬子が寺を建て、仏を祀ると疫病が流行り、多くの死者が出たため、敏達が仏教を禁止する法を出しました。それに同調した物部守屋は馬子の寺を焼き、仏を難波堀に投げ捨てたのです。江戸時代に明日香村豊浦の豊浦寺跡にある向原寺の池から仏像が出土し、これを守屋が投げ捨てたものとする説があります。この仏像は昭和40年代に盗難に遭ったのですが、2010年にオークションに出品されていたところを偶然見つけられ、現在は向原寺に戻っています。敏達は死後、母親である石姫が葬られている河内磯長中尾陵に追葬されました。現在、宮内庁が敏達天皇陵として治定している太子町の太子西山古墳は磯長谷で唯一の前方後円墳であり、表採された埴輪の年代からも敏達天皇陵である蓋然性が高いといわれています。

その次に即位したのは稲目の血を引く用明天皇です。用明は崇仏派だったのですが、即位後2年で死去し、磐余池上陵に葬られ、後に河内磯長陵に改葬されています。河内磯長陵については当該期の大型古墳が見当たらないため、太子町の春日向山古墳である可能性が高くなっています。次の崇峻天皇は馬子の後押しもあり、他の有力な皇子達との争いに勝利して即位しました。崇峻は馬子に擁立されたこともあり、天皇としての権力をふるうことができず、事実上の主導権は馬子が握っていました。それに不満を抱いた崇峻は馬子に対する警戒を強めたため、馬子の部下である東漢直駒に暗殺されました。遺体は即日に倉梯岡陵に埋葬されました。

592年に推古天皇は豊浦宮で即位し、以後約100年の間、飛鳥地域が政治の中心地となりました。向原寺境内の発掘調査により、豊浦寺講堂跡の下層で3×3間以上の掘立柱建物跡や、飛鳥の宮殿に特有の石敷が発見され、豊浦宮の実態が明らかになりつつあります。推古は603年に小墾田宮へ遷都しました。遷都の理由としては、豊浦宮が蘇我氏の邸宅を改築しただけの小規模な宮であったため、より大きな敷地を必要としたからであると思われます。従来、小墾田宮の位置は、明日香村豊浦と橿原市和田町に位置する古宮遺跡が推定されてきましたが、この古宮遺跡は宮殿というよりは庭園といった施設に近いと考えられています。そこで注目されるのが雷丘東方遺跡です。ここでは奈良時代の計画的に配置された建物群や、「小治田宮」と記された墨書土器が出土した井戸が発見され、奈良時代の小治田宮が雷丘東方遺跡周辺に存在したことが判明しました。それにより、推古の小墾田宮もこの付近にあった可能性が高



まりました。

また、馬子の邸宅とされているのが明日香村の島庄遺跡です。橿原考古学研究所と明日香村教育委員会の調査により、正方位ではない大規模な掘立柱建物群や一辺 42m、深さ 2 m の石張り方形池が検出されました。そしてそのすぐ横にあるのが馬子の墓とされる石舞台古墳です。ここは横穴式石室の編年観や島庄遺跡との関連性からほぼ確実視されています。推古の陵墓については、太子町に位置する巨大方墳の山田高塚古墳である蓋然性が高いと考えられています。推古天皇陵に関しては、『日本書紀』推古 36 年 9 月条に敏達との間に生まれた竹田皇子の墓へ合葬するという記事が見られるため、当初は「大野丘」に葬られていた可能性が高いとされています。その大野丘の墓については、2001 年に橿原市教育委員会が発掘調査を実施した橿原市の植山古墳とする説が有力です。

植山古墳は一辺 40×27m の方墳で、東西に両袖式横穴式石室が 2 基配置されています。その後、河内の磯長山田陵へ改葬されました。山田高塚古墳は一辺 66×58m の方墳であり、江戸時代には埋葬施設が開口していたらしく、横穴式石室内に二つの石棺が納められているという記録があります。さらに一つの墳丘に二つの埋葬施設を有する双室墳であるという考えもあります。また推古の摂政として活躍したとされる厩戸皇子（聖徳太子）の墓については、叡福寺北古墳とする説が有力です。中世より聖徳太子信仰がおこなわれ、その治定に疑いないとされていたことから、古墳の年代を決定する標式古墳とされてきましたが、近年の考古学と文献史学の研究成果によって疑問を提示する研究者もいます。

### 【蝦夷と入鹿の時代】

推古の死後に即位したのが舒明天皇です。舒明は日本最初の官寺である「百濟大寺」と百濟宮の創建につとめました。百濟大寺は厩戸皇子が創建したとされる熊凝精舎がその前身とされています。百濟大寺の所在については長らく不明でしたが、1997 年から奈良国立文化財研究所によって行われた桜井市の吉備池廃寺の調査により、大規模な金堂と塔と考えられる基壇が検出され、文武天皇の大官大寺に匹敵する規模を有することが判明し、有力な候補地となっています。舒明の生前に完成することはありませんでしたが、これほどの規模を誇る寺院を建立した意図は何だったのでしょうか。

舒明の治世では蘇我馬子の子と孫である蘇我蝦夷、蘇我入鹿が権勢をふるい、天皇を凌駕する権力を持っていました。そのような中、天皇の隔絶化を目指した舒明が規模や内容全てにおいて他の氏寺を凌駕する寺院を建立することにより、その権威を維持しようとしたものと考えられます。舒明は 641 年に亡くなり、643 年に滑谷岡から押坂陵へ改葬されます。滑谷岡について詳細が不明ですが、押坂という地名は忍坂に代わり、同地に同時代の古墳が他にないこと、過去に横穴式石室が開口していたこと、墳丘が八角形を呈していることなどから、押坂陵は段ノ塚古墳でほぼ疑いないと思われま

す。舒明の治世に権勢をふるった蝦夷と入鹿ですが、645 年に乙巳の変により、滅びてしまいます。明日香村の甘檜丘東麓遺跡から 7 世紀半ばの建物跡と焼土が検出され、乙巳の変で入鹿が殺害された後に蝦夷が自宅に火を放ったという記事に合致することから、この遺跡は蝦夷の邸宅に関連するものである可能性が高いとされています。蝦夷と入鹿の墓については、生前に「大陵、小陵」を築くという『日本書紀』の記述があり、橿原市の五条野宮ヶ原 1・2 号墳がその候補としてあがっていますが、詳細はわかりません。その後、天皇家は律令国家の完成をめざし、さらなる政策を進めることとなります。明治維新と並ぶ大変革期にあたる時代といっても過言ではないでしょう。

## 《蘇我四代時代の年表》

表7 蘇我四代時代の年表

536年	宣化元	蘇我稲目が大臣に就任する。
538年	宣化3	百済の聖明王から仏教が伝えられる。
540年	欽明元	欽明天皇が即位する。
562年	欽明23	任那日本府が滅びる。
570年	欽明31	蘇我稲目が没する。
571年	欽明32	欽明天皇が没する。檜隈坂合陵に葬る。
572年	敏達元	敏達天皇が即位する。 蘇我馬子が大臣に、物部守屋が大連に就任する。
585年	敏達14	敏達天皇が没する。
586年	用明元	用明天皇が即位する。
587年	用明2	蘇我氏と物部氏による戦争が行われ、蘇我氏が勝利し、物部氏が滅びる。 用明天皇が没する。磐余池上陵に葬られる。
588年	崇峻元	崇峻天皇が即位する。飛鳥衣縫造の家を壊し、飛鳥寺の造営を開始する。
591年	崇峻4	敏達天皇を磯長谷の石姫墓に追葬する。
592年	推古元	東漢直駒が崇峻天皇を暗殺する。即日倉梯岡陵に埋葬される。 推古天皇が豊浦宮で即位する。 用明天皇を河内磯長陵に改葬する。
593年	推古2	飛鳥寺の塔心礎に仏舎利を奉納する。 厩戸皇子が推古天皇の摂政となる。 難波で四天王寺を建立する。
594年	推古3	仏教興隆の詔を発する。
600年	推古8	遣隋使を派遣する。 (『隋書』倭国伝)
601年	推古9	厩戸皇子が斑鳩宮を造営する。
602年	推古10	百済僧の観勒が暦本や天文地理などの書を伝える。
603年	推古11	小墾田宮に遷都する。 冠位十二階を制定する。
604年	推古12	憲法十七条を制定する。
607年	推古15	遣隋使として小野妹子を派遣する。



図30 五条野丸山古墳



図31 梅山古墳



図32 太子西山古墳

608年	推古16	小野妹子が答礼使斐世清とともに帰国する。妹子とともに学問僧である南淵請安と留学生である高向玄理らを派遣する。
609年	推古17	飛鳥寺本尊の銅造丈六仏が完成する。
610年	推古18	高句麗僧の曇徴が紙・墨・絵具の製法を伝える。
614年	推古22	遣隋使として犬上御田鍬らを派遣する。
612年	推古20	堅塩媛を檜隈大陵に改葬する。
618年	推古26	隋が滅亡し、唐が建国される。
620年	推古28	厩戸皇子と蘇我馬子が『天皇記』『国記』を著す。
622年	推古30	厩戸皇子が没する。磯長墓に葬られる。
626年	推古34	蘇我馬子が没する。桃原墓に葬られる。
628年	推古36	推古天皇が没する。 竹田皇子が眠る大野丘に葬られるが、後に磯長山田陵へ改葬される。
629年	舒明元	舒明天皇が即位する。
630年	舒明2	遣唐使を派遣する。 飛鳥岡本宮へ遷都する。
632年	舒明4	犬上御田鍬らが唐から帰国する。
628年	舒明8	田中宮へ遷都する。
639年	舒明11	百濟大寺と百濟宮の造営を開始する。
640年	舒明12	南淵請安、高向玄理らが唐から帰国する。
641年	舒明13	蘇我倉山田石川麻呂が山田寺の造営を開始する。 舒明天皇が没する。
642年	皇極元	蘇我入鹿が執政となり、葛城の高宮に祖廟を造り陵と称する。
643年	皇極2	蘇我入鹿が山背大兄王を襲う。 舒明天皇が滑谷岡から押坂陵へ改葬される。
644年	皇極3	蘇我蝦夷と入鹿が甘檜丘に家を並べて宮門と称する。
645年	大化元	乙巳の変がおこる。 都を難波長柄豊碕に移す。
646年	大化2	改新の詔を宣する。



図 33 植山古墳



図 34 山田高塚古墳



図 35 段ノ塚古墳

## 関連本の紹介

### 《飛鳥を知るための本》

発行年	編著者名	書名	発行元
1972	末永雅雄編	『飛鳥 高松塚古墳』	学生社
1974	明日香村	『明日香村史』	明日香村史刊行会
1977	門脇禎二	『飛鳥 その古代史と風土 NHK ブックス 127』	日本放送出版協会
1978	網干善教	『飛鳥の遺跡』	駸々堂
1980	網干善教	『古代の飛鳥』	学生社
1985	狩野 久・木下正史	『飛鳥藤原の都 古代日本を発掘する 1』	岩波書店
1988	網干善教	『飛鳥発掘 成果と展望』	駸々堂
1988	井上光貞・門脇禎二編	『古代を考える 飛鳥』	吉川弘文館
1990	直木孝次郎	『飛鳥 その光と影』	吉川弘文館
1993	木下正史	『地中からのメッセージ 飛鳥・藤原の都を掘る』	吉川弘文館
1994	猪熊兼勝	『飛鳥の古墳を語る』	吉川弘文館
1994	門脇禎二	『飛鳥古京ー古代びとの舞台ー』	吉川弘文館
1994	菅谷文則・竹田正則	『日本の古代遺跡 7 奈良飛鳥』	保育社
1996	河上邦彦・菅谷文則・ 和田萃	『飛鳥学総論 飛鳥学第1巻』	人文書院
1996	河上邦彦・菅谷文則・ 和田萃	『飛鳥古代復元 飛鳥学第2巻』	人文書院
1996	八木 充	『研究史 飛鳥藤原京』	吉川弘文館
1998	亀田 博	『飛鳥の考古学』	学生社
2001	千田 稔	『飛鳥ー水の都ー 中公新書 1607』	中央公論社
2002	門脇禎二	『飛鳥と亀形石』	学生社
2003	網干善教	『古都・飛鳥の発掘』	学生社
2003	河上邦彦	『飛鳥を掘る 講談社選書メチェ 258』	講談社
2003	和田 萃	『飛鳥ー歴史と風土を歩くー 岩波新書』	岩波書店
2004	河上邦彦	『飛鳥発掘物語』	産経新聞社
2006	明日香村	『續 明日香村史』	明日香村史刊行会
2007	黒崎 直	『飛鳥の宮と寺 日本史リブレット 71』	山川出版社
2008	林部 均	『飛鳥の宮と藤原京 よみがえる古代王宮 歴史文化ライブラリー249』	吉川弘文館
2009	西川寿勝・相原嘉之・ 西光慎治	『蘇我三代と二つの飛鳥ー遠つ飛鳥と近つ飛鳥ー』	新泉社
2010	上田正昭	『倭国から日本国へー画期の天武・持統朝』	文英堂

2010	木下正史・佐藤 信編	『古代の都1 飛鳥から藤原京へ』	吉川弘文館
2010	伊達宗泰著・千賀 久 増補	『大和・飛鳥考古学散歩 増補改訂』	学生社
2011	千田 稔	『飛鳥の覇者 推古朝と斉明朝の時代』	文英堂
2011	吉川真司	『飛鳥の都 シリーズ日本古代史③ 岩波新書 1273』	岩波書店

### 《古墳を知るための本》

発行年	編著者名	書名	発行元
1965	森 浩一	『古墳の発掘 中公新書 65』	中央公論社
1969	末永雅雄	『古墳』	学生社
1989	白石太一郎編	『古代を考える 古墳』	吉川弘文館
1990	石野博信	『古墳時代史』	雄山閣
1993	石野博信他編	『古墳時代の研究 1～13』	雄山閣
1996	上田宏範	『増補新版 前方後円墳』	学生社
1996	大塚初重・小林三郎編	『増補・新装版 古墳辞典』	東京堂出版
1999	白石太一郎	『古墳とヤマト王権 文春新書 036』	文藝春秋
2001	白石太一郎	『古墳とその時代 日本史リブレット 4』	山川出版社
2003	泉森 皎編	『大和の古墳Ⅰ 新近畿日本叢書大和の考古学第2巻』	人文書院
2004	泉森 皎編	『日本考古学を学ぶ人のために』	世界思想社
2006	河上邦彦編	『大和の古墳Ⅱ 新近畿日本叢書大和の考古学第3巻』	人文書院
2011	土生田純之	『古墳 歴史文化ライブラリー319』	吉川弘文館

### 《飛鳥の考古学図録》

発行年	編集	書名	シリーズ名
2003	明日香村教育委員会	『発掘された飛鳥—20世紀の飛鳥考古学—』	飛鳥の考古学図録①
2004	明日香村教育委員会	『飛鳥の古墳—飛鳥の黄泉の世界—』	飛鳥の考古学図録②
2005	明日香村教育委員会	『飛鳥への邂逅—明日香石造物紀行—』	飛鳥の考古学図録③
2006	明日香村教育委員会	『飛鳥の宮殿—古代都市“飛鳥”を探る』	飛鳥の考古学図録④
2007	明日香村教育委員会	『飛鳥の寺院—古代寺院の興隆—』	飛鳥の考古学図録⑤
2008	明日香村教育委員会	『飛鳥の神社—神々が宿る社—』	飛鳥の考古学図録⑥
2009	明日香村教育委員会	『明日香文化財の精華—指定文化財の世界—』	飛鳥の考古学図録⑦
2010	明日香村教育委員会	『飛鳥前代—飛鳥の源流への旅路を往く—』	飛鳥の考古学図録⑧
2011	明日香村教育委員会	『整備された飛鳥の遺跡』	飛鳥の考古学図録⑨

## 図版出典

1	『西國三十三カ所名所圖會』	飛鳥資料館 1988	—
2	1976 年の調査	橿考研 2002	奈良県立橿原考古学研究所
3	三ツ塚古墳出土の修羅	近つ飛鳥 1999	大阪府教育委員会
4	担ぐ男子形埴輪	近つ飛鳥 1999	福島県立博物館
5	靱形埴輪	橿考研博 2008	奈良県立橿原考古学研究所
6	高松塚古墳墳丘断面図	奈文研 2009	奈良文化財研究所
7	搗棒の痕跡	奈文研 2009	奈良文化財研究所
8	石舞台古墳の貼石	京大 1937	京都大学考古学研究室
10	甕棺	弥生文化 2010	春日市教育委員会
11	長持形石棺	城陽市 1995	京都大学考古学研究室
13	陶棺	橿考研博 1997	奈良県立橿原考古学研究所
14	家形石棺	橿考研 1995	奈良県立橿原考古学研究所
15	夾紵棺	大阪府 1936	大阪府教育委員会
18	雨の宮 1 号墳	橿考研博 2004	中能登町教育委員会
21	春日向山古墳	近つ飛鳥 2010	宮内庁書陵部
23	石のカラト古墳	奈文研 2005	奈良文化財研究所
26	金山古墳	河南町	南河内郡河南町
30	五条野丸山古墳	近つ飛鳥 2010	宮内庁書陵部
31	梅山古墳	近つ飛鳥 2010	宮内庁書陵部
32	太子西山古墳	近つ飛鳥 2010	宮内庁書陵部
33	植山古墳	近つ飛鳥 2010	橿原市教育委員会
34	山田高塚古墳	近つ飛鳥 2010	宮内庁書陵部
35	段ノ塚古墳	近つ飛鳥 2010	宮内庁書陵部

## DVD レーベル出典

石舞台古墳石室 京大 1937 京都大学考古学研究室

## 参考文献

- 飛鳥資料館 1998 『それからの飛鳥』 奈良国立文化財研究所  
 大阪府 1936 『大阪府史蹟名勝天然記念物調査報告』 第七輯  
 大阪府立近つ飛鳥博物館 1999 『修羅！その大いなる遺産 古墳・飛鳥を運ぶ』  
 大阪府立近つ飛鳥博物館 2010 『ふたつの飛鳥の終末期古墳 河内飛鳥と大和飛鳥』  
 大阪府立弥生文化博物館・九州国立博物館 2010 『邪馬台国 九州と近畿』  
 河南町教育委員会社会教育課 『史跡金山古墳公園 パンフレット』 大阪府南河内郡河南町  
 京都帝國大學 1937 『大和島庄石舞臺の巨石古墳』 京都帝國大學文學部考古學研究報告 第 14 冊  
 城陽市歴史民俗資料館 1995 『常設展展示案内 古墳のまつり』  
 奈良県立橿原考古学研究所 1995 『藤ノ木古墳第二・三次調査報告書』  
 奈良県立橿原考古学研究所附属博物館 1997 『大和の考古学 常設展示図録』  
 奈良県立橿原考古学研究所 2002 『大和の考古学 100 年』  
 奈良県立橿原考古学研究所附属博物館 2004 『前方後方墳 —もう一人の主役』  
 奈良県立橿原考古学研究所附属博物館 2008 『はにわ人と動物たち—大和の埴輪大集合—』  
 奈良文化財研究所 2005 『奈良山発掘調査報告 I —石のカラト古墳・音乗谷古墳の調査—』 学報第 72 冊  
 奈良文化財研究所 2009 『高松塚古墳石室解体事業 発掘編』



---

石舞台古墳～巨大古墳築造の謎～ 解説書

平成 24 年 1 月 印刷・発行

編集 関西大学文学部考古学研究室

発行 奈良県明日香村

---



飛鳥・藤原の宮跡とその関連資産群

「飛鳥・藤原」を世界遺産に！